

II-2

「モノ」と人

—祭礼品、贈答品、芸術品としての饅頭—

周星

(藤川美代子訳・小熊誠監訳)

党家村は、陝西省韓城市の市街地から北東へ9kmほど離れたところに位置する。東は黄河から3.5km、西は国道108号線から1.5kmの距離である。党家村をとりまく地理的環境は、ちょうど黄土高原と八百里秦川¹⁾とが交わる地帯であり、典型的な黄土地形を成している。党家村は、河谷にできた台地の上に立地しており、傾斜地を背にして水辺に近く、村の南側に泌水と呼ばれる河が流れており、黄河へと注ぎこんでいる。泌水の兩岸と村の北側、そして南側の高台には果樹や山椒樹林、野菜畑、耕地がすさまじく広がっている。この村には、党と賈という姓の共有する二つの大きな一族があり、古くから、これら二つの姓の間で婚姻関係が結ばれている。他の姓を名乗る者はほとんどおらず、典型的な同族村落といえる。2006年の時点で、党家村は392世帯、1,373人の人口と、およそ2,220畝(ムー)²⁾の耕地があり、1世帯当たり平均で7畝の田畑を有している。ほとんどの村民は、小麦、トウモロコシ、山椒栽培などの農業で生計を立てている。その他の主要な収入源は、村外での仕事と、青壮年による出稼ぎに依っている。

党家村が位置する黄河中流の広大な土地は、中国において主要な小麦の生産地の一つであり、この地域に暮らす人々も小麦粉を主食とする。小麦粉を主食とする当地の生活のなかでは、長い間、主に女性たちによって、豊富な意味と多様な形態をもつ、この地域特有の「花饅頭」・「礼饅頭」文化が生みだされてきた。本論のなかで、「饅頭」とは小麦粉を発酵させ、それを蒸して作った食品を指し、陝西方言では「饅」、「饅饅」などと呼ばれている。そのうち「花饅頭」というのは、さまざまな形に整えられた饅頭や、さまざまな色に色づけされた饅頭を指している。さらに、「礼饅頭」とは、村人たちの間で相互に贈答品として贈られる饅頭や花饅頭を示す言葉である。いわゆる「蒸食」³⁾というのが、これらすべての饅頭類を表す総称である。

党家村において「発見」された花饅頭と礼饅頭

2007年2月16日から24日の春節の期間に、私は党家村において現地調査をおこなった。大みそかになると、各家庭で春節のために饅頭を蒸かす光景が見受けられ、このなかに、花饅頭や礼饅頭も含まれていた。党家村の家々には、春節前の晩になると花饅頭や礼饅頭を蒸かす伝統がある。旧暦十二月二十三日が過ぎたころ、家庭ごとに饅頭を蒸す仕度をはじめるのが一般的である。それぞれの家庭では、つきあいのある親戚の戸数や、贈り物を贈る相手の世代や長幼、人数などを考慮しながら、さまざまな礼饅頭・花饅頭を一度にすべて蒸し上げる。花饅頭や礼饅頭は、この地においてきわめて深遠な郷土文化を映しだすものの一つである。花饅頭や礼饅頭には多様な名称がつけられ、その種類も実に豊富である。これらは、重要な意味あいをもつさまざまな場面において村人たちに用いられる。そして、村人たち、とりわけ農婦たちは、花饅頭や礼饅頭に対して多くの「語り」をもっているのである。

大みそかになると、村人たちは各家庭において「接神」と呼ばれる儀礼をおこなう。「接神」とは、

庭の真ん中に小さな供物台を設け、そこに種々の供え物を並べ、その後で線香に火をつけ、爆竹を鳴らして、世代の上の者から順に家族全員が跪いて神を拝むことである。このときに用いる供物のなかに、「献爺饅」¹と名づけられたものがある。これは人の頭に似た形をした饅頭で、供物のなかでもひときわ際だった特徴をもっており、見る者の興味を引く。

旧暦一月一日の早朝には、農家の家族三代にわたる男性たちによって「祭神」の儀礼と「祭祖」の儀礼がおこなわれる。このときにも、「献爺饅」が供物として用いられる。

旧暦一月二日があると、すでに婚出した娘や姉妹たちが実家へと戻り、新年のあいさつをする。このとき女性たちが携えてくる数多くの贈り物のなかには、例外なくさまざまな礼饅頭や花饅頭が含まれるのである。

旧暦一月三日になると、人々は自らの母方オジに当たる人の家を訪れて新年のあいさつをする。このときにも、人々は多種多様な花饅頭や礼饅頭を持参する。この日の午後、私たちは村の幹部、党文涛宅の四合院に設けられた「民俗館」を見学することができた。そこではいくつかの大きな棚に「花饅頭」が陳列されており、その種類は数十種に及んだ。形は実に多彩で、その巧みな仕上がりはいずれも目を見張るほどであった。ここで陳列された花饅頭や礼饅頭は、「展示」することを意図したためかもしれないが、私たちが農家で通常目に見ることができるいささか素朴な花饅頭と比べて、明らかに派手で、色も鮮やかであり、その仕上がりもいくらか精巧になっている。党家村では、花饅頭を作ることのできる嫁や姑、なかでも手先がすぐれて器用な何人かの女性たちが人気を集めており、年越しの前に饅頭を蒸すときが訪れると、多くの家庭から彼女たちに手伝いのお呼びがかかるのだという。

旧暦一月四日の午前中に、村人の一人である李敏傑の家でおこなわれる婚礼に参加した。春節というのは、若者たちの婚礼が比較的集中する時期でもある。婚礼の際には親戚や友人、近隣の人たちも祝福に訪れるのだが、そのときに彼らが持ってくる主な贈り物が礼饅頭である。新郎の家にあるヤオトン⁴のなかでは、「手伝い」や案内をしに来た数人の近隣の老人たちが、客人のもってきた礼饅頭と花饅頭を一つ一つ確認し、その数をあらためる。この老人たちはそれを帳面に記録してゆく。後日返礼をするときに、参考とするためである。その場に居合わせた私たちが、祝福に訪れた客人たちの携えてきた礼饅頭や花饅頭について聞き取り調査をおこなったところ、村の花饅頭や礼饅頭に関する多くの情報を得ることができ、大きな興奮を覚えた。たとえば、姑（父の姉妹）や舅（母の兄弟）、姨（母の姉妹）など、重要な親戚にはいくつの饅頭を贈らなければならないとか、反対にごく普通の関係にある近隣の人が贈り物をする場合には、いくつでいいかといったようなことを聞くことができた。

旧暦一月六日になると、私たちは別の家庭で息子のためにおこなわれた婚礼に参加する機会に恵まれた。この新郎と新婦はいずれも、大学の入学試験に合格した後すぐ党家村を離れた「よそ者」であった。そのため、祝いに訪れた親戚や友人、近隣の人たちがもってきた贈り物は、少し変わっていた。少なくとも礼饅頭の数の上で挙げた例より少なかった。しかし、母親から贈られる「ナツメ饅頭」（これも、花饅頭の種類であり、非常に大きなものである）と、新郎新婦の寝室に置かれる虎の形をした花饅頭は、どちらも依然として古くからの伝統に則ったものであった。この日、村のなかにある別の家では、おばあさんのための年祝いがおこなわれていた。このときに孫たちがおばあさんに贈ったのは、孝行を表すための「寿桃」と呼ばれる花饅頭と、「寿盤」と呼ばれる花饅頭であった。

旧暦一月七日、私たちは党家村からほど近い距離にある西庄鎮というところへ向かい、花饅頭を注文製造する小さな店を訪問した。この店の主人はとても腕のよい女性であった。この女主人は花饅頭の種類について教えてくれ、私たちに何枚もの写真を撮らせてくれた。この花饅頭の形や呼び方、種類というのは、党家村のものと同様であったが、その仕上がりは党家村のものとは比べてさらに細やかなものであった。これはおそらく、花饅頭作りが商業化、あるいは職業化することによる変化であると

いえよう。この店の広告看板には、「各種門戸饅頭のご注文を承ります」と書かれていた。ここでいう「門戸饅頭」とは、花饅頭と礼饅頭を指すのだという。これは、陝西省の人々が、年越しや冠婚葬祭のときに互いの家を訪れることを「門戸巡り」と表現するので、門戸饅頭とは、門戸へ行く際に欠かすことのできぬものとしての花饅頭と礼饅頭を示すのである。

2007年の夏休みになって、私は調査をおこなうために再び党家村を訪れた。そのときは、ちょうど「七夕」に当たっていた。党家村は七夕を迎えて活気にあふれていた。この日は、村のそこので爆竹が鳴り響き、子どもたちにもごちそうがふるまわれた。さらに夜になると、女の子たちは家の庭の中央に設けられた祭壇で焼香し、月を拝むのである。この祭壇には、スイカや梨、ブドウなど果物類のほか、花饅頭も供えられる。七夕に用いられる花饅頭は、桃や梨、ザクロ、ブドウといった果物の形を模ったものがほとんどである。同い年の農婦たち何人かが事前に誘い合わせて、花饅頭作りをする場面に出会った。彼女たちはおしゃべりをしながら、手でさまざまな形を作りだしていく。互いに息をぴったりあわせて協力する姿が印象的であった。そのなかの、私が党家村でお世話になった大家のおばさんが言うには、彼女たちはもう長い間、こんなに楽しい時間をともに過ごしたことなくなかったのだという。今は皆忙しくしており、普段でもいっしょに集まることが少なくなった。特に花饅頭をいっしょにこしらえる機会は、だんだん少なくなったのだという。さまざまな果物の形をした花饅頭のほか、「穀兒」と呼ばれるかご型の花饅頭や、「硯台」と呼ばれる硯型の花饅頭を作り、それぞれ女の子と男の子にあげている。これらの花饅頭には、女の子は手先が器用になりお裁縫が上手になりますように、男の子は学問の道へ進めますように、との思いが込められている。

祭礼品、食品、贈答品、芸術品

党家村で調査を進める私にとって最も印象的だったのは、饅頭（饅）や花饅頭、礼饅頭はある種の祭礼品、食品であると同時に、贈答品や芸術品としても存在しており、それらは性格や機能のうできわめて複雑な関係をもっているということであった。もっとも、一般的な蒸し饅頭や、シンプルな形をした饅頭を芸術品とみなすことはできないだろう。しかし、そのほかの花饅頭や礼饅頭についていえば、用いられる場面が変われば、上述したような性格や機能はそれぞれ置き換え可能なものとなる。たとえば、祭礼が終わった後の供え物は食用として用いることができるし、贈り物として親戚や友人に贈ることも可能である。村人たちは花饅頭を芸術品として観賞することもあれば、もちろん贈り物として用いることもある。きわめて一般的な饅頭や蒸し饅頭であっても、もしもそれを新年のあいさつに使おうとするならば、それは自ずと贈答品へと「昇格」するのである。

党家村の人々が年越しの際に神霊へ奉げる饅頭は、「献爺饅」と呼ばれており、大きな饅頭で、通常は約500gの小麦粉を使い、人間の頭と顔を模して作られている。祭礼品として用いられるこうした饅頭は一説によれば、明朝末期に韓城のあたりで清の兵士に抵抗したことで知られる英雄、劉永祚が最後に首を斬られてしまったことと関係するのだともいう。この献爺饅は、神祭祀や祖先祭祀の供え物として用いられるのが一般的である。しかし、春節になって、より下の世代の者が年長者の家を訪れて新年のあいさつをする際、しばしば献爺饅を持って行って敬意を示す。さらに、献爺饅はお返しとして、あるいは客人をもてなす品として用いられることもある。こうして、「爺」を敬う役割を終えた饅頭を食べることには、神と「共食」という意味も含まれる。かつての党家村では、年越しに際して各家庭の台所に安置された竈神の像の前に献爺饅と「ナツメ饅頭」を供える人もいたのだという。この「ナツメ饅頭」というのは、赤いナツメをはめこんだ花饅頭の一種で、これも祭礼品の一つである。

旧暦一月十五日は、党家村において「灯節」と呼ばれ、人々は「年灯饅頭」を蒸す。この日の夜になると、人々は穀物を蓄える倉庫の上に、燈籠と小麦粉を蒸して作った子猫を載せる。水甕の蓋の上に

も、燈籠と小麦粉を蒸して作った魚を載せる。また、井戸にも、燈籠と小麦粉を蒸して作ったカエルを載せるのである。さらに、庭には燈籠と小麦粉を蒸して作った麦わらが置かれる。小麦粉を蒸して作られたこうした動物や物というのは、一方では祭礼品としての側面をもっており、吉祥や天候順調、衣食の充実を願う意味が込められている。そしてまた一方では、村人たちが作りあげる芸術品としての側面も持っている。そして、どちらにせよ、最後には子どもたちのごちそうになる。

旧暦二月二日になると「嚙虫饅」を、また端午節になると「箕饅頭」を、そして中秋節になると「月餅饅」をそれぞれ蒸して準備する。こうして党家村では、年中行事がおこなわれるときにはほとんどいつでも、村人がその場に合わせた儀礼的な食品として花饅頭を準備する。前述したとおり、人々は七夕の際に、「巧娘娘」と呼ばれる織姫の神像の前に果物のほかにさまざまな果物を模った花饅頭を供える。このほかにとりわけ特徴的なのは、ここで「硯饅頭」あるいは「殻兒（裁縫道具入れのかご）饅頭」が供えられることである。殻兒饅頭のなかには、はさみや目打ち、針、糸などお裁縫道具を模ったものが入られ、神への奉げ物として供え終わると、女の子に渡す贈り物²とされる。これはまさしく、裁縫技術の上達を願う七夕の趣旨にふさわしいものであるといえよう。一方の硯饅頭は、男の子への贈り物として作られるものである。この硯の上には、筆立てや筆といった文房具を模ったものが置かれる。どちらの場合も、こうした花饅頭は最後には子どもたちによって食べられることになる。これは、花饅頭いっぱい込められた願いが子どもたちと一体化することを意味しているのである。

これまでに述べてきた花饅頭と礼饅頭はいずれも、村人たちの素朴で真摯な思いが込められている。実際のところ、党家村の村人たちは花饅頭の仕上がりが細かく繊細であるほど、また手がこんでいるほど、贈り物を贈る相手に対する思いが重厚なものになると考える傾向にある。たとえば、嫁ぐ娘のために母親が作る「ナツメ饅頭」や、母方の祖母が孫娘のためにこしらえる「殻兒饅頭」、そして世代の下の者が年長者に対して準備する「寿盤」といったものはいずれも、人々が手間ひまをかけてこしらえる労作であるために、自然とそこには大きな愛情と思いが託されることになる。

花饅頭をこしらえる際に用いられる小麦粉は一般的に、普通のものよりは上等なものを使うことが求められる。さらに、水を加えて捏ねるときに若干の硬さと弾力を出さなければならない。こうすることで、複雑な形でも簡単に作れるようになるし、蒸しても形が崩れずにすむのである。花饅頭をこしらえるときには、多くの人手が協力しあうこともしばしばである。家の両隣の農婦たちが集まって、どこの家庭のものを先に作るか相談しあい、今日はこの家、明日はあの家というように互いに手助けしながら花饅頭を作るというのが、一般的である。花饅頭を作る際には、温めたオンドルの上に大きめのまな板を置き、農婦たちがその周りを取り囲むように座る。そして、小麦粉を捏ねる者は捏ねる作業を、「花」の形を作る者は「花」を作る作業を、というように分業して互いに協力しあう。こうして女性たちがおしゃべりに興じながら作業する姿というのは、楽しさと明るさに満ちた雰囲気醸し出すのである。

花饅頭や礼饅頭ができあがるまでの過程は、主に捏ねる・つまむ・撚る・切る・つぶす・編む・貼る・色を付ける・型にはめる・蒸すといった作業の工程から成る³。村の女性たちが用いる道具は、麵棒やはさみ、箸、へらといった簡単なものである。さらに、この女性たちは、色とりどりの豆やトウモロコシの粒、ナツメの実などを用いて、花饅頭を華やかに飾りつけるのがとても得意である。村のなかでもとりわけ器用に花饅頭を作ることのできる女性は引く手あまたで、村人たちがこぞってそうした女性を家へ招こうとする。場合によっては、まるでスターになったりする。また、党家村の人々が女性たちを評価する際には、しばしば「蒸食」を上手に作るかどうか重要な要素の一つとなる。そのために、何人もの農婦たちが一堂に会して花饅頭を作る場合には、それが技の競争のような意味合いをもつことがあるのである。

「蒸食」のつきあい

党家村には、「蒸食のつきあい」ということわざがある。これは、村人たちが「蒸食」の贈答という行為をとおして親戚や友人、近隣などと親しくつきあうという民俗を広く指す言葉である。こうした言葉は、少なくとも韓城一帯で広く用いられているというが⁴、それよりもさらに広い地域において用いられている可能性がある。党家村において、年越しや季節の節目にみられる親戚同士、友人同士の行き来や、誕生・成長・結婚・長寿の祝い・葬式など重要な人生儀礼におこなわれる親戚や近隣の助け合いとつきあいは、物を贈るといふ村人たちの行為と切り離すことができないほど密接に関わっている。そして、「蒸食」は、こうした贈答においてみられる基本的な要素である。

党家村では、生まれたばかりの子どもが満一ヶ月を迎えると、盛大なお祝いがおこなわれる。このとき、子どもの母親の実家側やそのほかの親戚、友人たちは、「圏圈子」もしくは「圏圈饅」と呼ばれる饅頭を送らねばならない。この「圏圈子」というのは、重さ約 250g ほど、中心に穴の空いたドーナツ状のもので、上には草花などの紋様がつけられている。小麦粉で作られるこうした輪っか状の食べ物は、赤ちゃんを家に囲い、つなぎとめておくという両親の願いが込められている。こうして嬰兒の満一ヶ月を祝うために贈られる花饅頭には、韓城の地域的特色が含まれている。これらは小さく精巧なもので、その形や模様はさまざまで、どれも模様の真ん中には慶事を示す小さなナツメの実が一つ載せられている。そのほとんどは、蒸し饅頭の上に輪っか状の模様をつけられたもので、これは「満月（満一ヶ月）花饅」と呼ばれる。さらに、子どもが生後百日目を迎えるときには、親戚や両親の友人たちから「猫饅」とか「虎饅」などと呼ばれる饅頭が贈られる。形や呼び方には若干の差異がみられるものの、猫饅・虎饅の二つはいずれも、猫や虎に子どもを守ってもらおうとする願いを反映している。つまり、そこには、健康に成長してほしいという大人たちの子どもに対する望みが込められるのである。百日を終えた後には、麦が収穫されるのを待って、毎年、子どもの母方の祖母から猫饅や虎饅が贈られる。これも、まさに子どもがすこやかにたくましく育つようにという気持ちを示しているのである。

党家村において、男女が婚約をするとき、女性方は「虎饅」を一对、携えるのが一般的である。女性の母親は、新しく娘の夫となる男性に小麦粉で作った「座虎」と呼ばれる饅頭を贈る。これは、堂々とした虎を模ったもので、将来の婿がいつのときも強く勇ましく、娘を大切に守ってくれるようにとの思いが込められるという。一方の男性側は、女性側が帰ろうとするときに「魚兒鮎蓮饅」あるいは「魚饅」という名のつけられた饅頭を贈らねばならない。ここには、将来の嫁が魚のように軽やかで賢くあるように、また蓮の花のように清らかであるように、という新郎の母から新婦に対する望みが託される。小麦粉で作られるこうした魚は、まさに「蓮の花の間を泳ぎまわる魚」や「蓮に戯れる魚」といったものを表しており、韓城一帯ではほとんどの地域にみられる形といえる⁵。虎饅と魚饅の贈答のやりとりからは、男性側と女性側の双方が結婚前の約束事に同意したということのみでとれる。さらに、婚礼がおこなわれる際になると、母親は洗面器ほどの大きさの花饅頭をこしらえ、嫁入り道具として娘にもたせる。これは、「ナツメ饅頭」と呼ばれている。ナツメ饅頭の下部は蓮の花の形をしており、その上部には、蜂の巣状をした蓮の花托や蕾、浮き草、鳥や魚といったものが挿し込んであったり、重ねられていたり、貼りつけられたりしてところ狭しと並んでいる。ナツメ饅頭と名づけられたこの花饅頭は、男性側から贈られる魚饅に対して、女性側から返礼としてもたらされるものであるとみることができ。そして同時に、これはこれから家を出て嫁いでいこうとする娘へ母親から贈られる、深い愛情のこもった祝福の形であるともいえよう。

年祝いとして老人たちに贈られる花饅頭は、「寿桃饅」、「寿盤饅」などと呼ばれている。老人たちが「長寿の祝い」をしてもらうようになるのは、一般的には六十歳を過ぎてからである。毎年、祝福がおこなわれるのだが、十年ごとに大規模な祝いの行事がとりおこなわれる。党家村でみられる花饅頭に

は、「十二支」と名づけられたものがある。長寿祝いをしてもらう老人の生まれ年になると、人々はその年の干支にちなんだ形の花饅頭を作り、それを贈り物として祝いの気持ちを示すのである。息子や娘をはじめとする下の世代にとって、老人の誕生日を祝うことは一種の親孝行の形であるというのが、村人たちの一般的な考え方である。老人の甥や姪たちは「寿盤」や「寿桃」を老人に贈り、近隣の人たちでさえも、「寿桃」を携えて祝福に訪れる。そのほかに、老人のもとには鶏卵や長寿を祝うための書や額、対聯といったものが贈られてくる。寿桃は偶数であることがほとんどであるが、四個あるいは六個というようにその数はまちまちである。桃の形に似ているというだけの単純な作りで、上に紋様があるものや、吉祥を示す「五福捧寿」⁵⁾と呼ばれる図絵が描かれたものなども見受けられる。寿盤は、その重量も寿桃よりずっと重く、形も大きい。一つは1kg程度の重さで、円盤の形をしており、中には、糖蜜やゴマ、胡桃、落花生などの砕いたものが餡として入っている。そしてその上部には、花が飾りつけられたり、「五福捧寿」や「寿」の字、小寿桃の紋様などがこしらえられている。寿盤を作るときには、時間と労力を費やすことから、これが年長者を祝福するのに申し分ないものとして用いられているのだといえよう。近年は都市的なライフスタイルの影響もあってか、党家村でも誕生ケーキが少しずつ流行しはじめているようである。

老人がこの世を去ると、村人たちから忌家へ、「盤子饅」や「小圓饅」と呼ばれるものが贈られる。盤子饅はそのほとんどが精進のもののみで作られており、紋様もなく、平たい円形をしている。盤子饅は一つ500gほどの重さで、逝去した老人があつた世で功德を円満に全うすることができるように、との思いがこめられる。小圓饅のほうは半球形をしており、その大きさは盤子饅の四分の一ほどである。

党家村をはじめとする韓城一帯において、蒸食を贈答や返礼に用いる蒸食のつきあいというのは、多くの場合、人々がモノを贈りあう行為であり、それが同時に、助けあいの行為ともなっている。冠婚葬祭のさまざまな場面において、親戚や友人たちの携えてきた礼饅頭は、その主催者たちが来客を接待するのに用いられることも多い。礼饅頭のおかげで、大規模な会食を準備する家庭の負担はある程度軽減されることになるのである。党家村において、さまざまな形をした蒸食（礼饅頭・花饅頭）というのは、一つのきわめて完全なる象徴体系を構成している。すなわち、礼饅頭や花饅頭は、どれをとってみても、具現化された記号としてみなすことができる。それらのなかには、この村に暮らす人々なら誰でも共有する特定の意味や価値、情感が浸透している。蒸食のつきあいという郷土の伝統には、この郷村社会における人間づきあいの基本的な特徴がぴったり反映されている。党家村において、礼饅頭や花饅頭の種類や形、様式、数、互いの換算方法、そしてそれらを贈りあう時期や対象といったもののすべてに、長い間民間に広がってきた一種の決まりごとが具わっている。こうした決まりごとは、村人たちにとって最も基本的な生活上の常識となっており、研究者の立場からみれば、これらはいずれも、きわめて重要な「民俗知識」なのである。

村人たちが贈り、受けとり、返礼する際に用いられる礼饅頭や花饅頭の種類や模様、大きさ、数といったものは、その程度こそ異なれ、当事者たち同士の社会関係や、世代の上下、血縁の遠近、ときには個々人の誠意の厚さといったものまでもきわめて明確な形で映しだしている。人々は、礼饅頭や花饅頭の種類、大きさといったほんのわずかなことから、それがどのような関係にある人から贈られてきたものなのかということまでも察することができるのである。たとえば、寿桃や寿盤、献爺饅などは世代の下の方から年長者へ贈られ、その意味は、年上に対する孝順や敬いの気持ちである。一方、圏圏饅や穀兒饅、硯台饅などは、年長者から年少者へと贈られるものであり、そこには思いやりや慈しみといった心意が込められる。圏圏饅を受けとった者が、その返礼として敬爺饅を贈るということもしばしばみられるが、その中にも、世代の上下関係といった意味が隠されている。

村人たちは、基本的には血縁関係の遠近によって、相手に贈る礼饅頭や花饅頭の数を決めている。蒸

食は、「百」を単位として数えることが多い。最も深い人情（礼）が込められるときには、三百個の饅頭が用いられ、そこから二百、百、五十、それ以下というように数が小さくなっていくのである。例えば、とりわけ近い姻戚や母方舅甥関係、その他義理の父母の葬式（年下から年上）、オイつまり兄弟姉妹の息子の結婚式（年上から年下）の場合は、三百個の蒸食が贈られる。一般的に父方や母方のイトコ関係、すなわち父の姉妹とその夫、母の姉妹とその夫の葬儀、あるいは姉妹の子どもの結婚に対してオバすなわち姑や姨から贈られる蒸食の数もそれぞれ二百個である。そのほかの場合にはいずれも百個の饅頭が用いられる。近隣の関係は、さほど重くないことが一般的である。しかし、双方の関係がよりよいものであったり、より親密であったりする場合には、この人情の深さによって饅頭を百個にしたり、五十個にしたりすることがある。ここからみえるのは、よりよい人間関係を作りだし、それを維持してゆこうとする人々の姿である。そして、この礼饅頭を受ける側は、蒸食をはじめとする贈り物の内容をすべて帳簿に記録しておき、返礼をするときの根拠とするのである。

今後の課題

民俗学における物質文化研究では、民具や農具、家具といった「ハード」なモノにより重点が置かれるきらいがあった。これは、長期間の使用と保存に耐えうる形をもっているためである。それに対して、「ソフト」なモノは、たとえば、本稿で検討を重ねてきた花饅頭のほかに、切り紙細工、年画、張り子、タルチョー⁶⁾といったものがある。それは、「使用」されることよりもむしろ「消費」されることのほうに価値が置かれているとってよい。それゆえに、これらはソフトかつ短命であり、食べられて形をなくしたり、風化してしまったり、捨てられたりする。しかし、こうしたソフトなモノも、ハードなモノと同じだけの学術的価値をもちあわせているのである。ソフトなモノも、私たちの暮らす「物質」世界の一部をなしているのであり、ハードなモノと同様、文化的な表象に用いられ、その内にさまざまな意味を含んでいるのである。

近年、山西省や陝西省の一部にみられる「花饅頭」の民俗は、中国政府の手によって国家レベルの非物質文化遺産に登録されることになった。このことはまさに、この種の研究が人々の幅広い関心を集めはじめていることを物語っている。花饅頭や礼饅頭は、きわめてありきたりの「食品」である饅頭から発展して生まれたものである。これらは場面に応じて、「祭礼品」としても、「贈答品」としても用いることが可能である。そればかりか、草の根の性格を帯びた民間の「芸術品」となることすらあるのである。それらは、あっという間に消費されてしまうために、「作品」としてその姿を留めておくことは難しい。したがって、これを瞬く間に姿形を消してしまう「民俗芸術」⁶⁾と呼ぶこともできるだろう。しかし、文献資料を検索すると、花饅頭や礼饅頭について仔細まで入念にとりあげた著作や論文がきわめて少ないという現実と直面する。そしてこのことは、花饅頭や礼饅頭についての研究が、今後も探究をつづけるだけの余地を残していることを意味するにほかならない。私は、これからも花饅頭や礼饅頭とこれらに関わる問題について、さらにフィールドワークをつづけ、その研究のなかで会得した知識を学界に広く発信しつづけることができれば幸いである。

註

- 1 この地域の人々は、神を「爺」と呼ぶ。これは一種の尊称である。
- 2 党康琪編『党家村人説党家村』1999年、79-82頁。
- 3 李文英『民居瑰宝党家村』陝西人民教育出版社、2002年、218-223頁。
- 4 張建忠主編『陝西民俗採風（関中）』西安地図出版社、2000年、253-254頁。
- 5 李辛儒『民俗美術與儒学文化』中央民族大学出版社、1992年、92-93頁。
- 6 周星「人類学者如何看待民俗的芸術」中国芸術人類学学会編『芸術人類学理論與田野』上海音楽学院出版社、2008年、35-42頁。

訳者註

- 1) 八百里秦川とは、秦嶺の北側にある渭河の沖積した谷や平原を指している。
- 2) 中国において、1ムーは6.667アール、すなわち15分の1ヘクタールを表す単位である。
- 3) 「蒸食」とは、小麦粉を使い、蒸して作った食品全般を示す言葉である。訳文中では、原文中のニュアンスを生かすために、あえてこの言葉を用いることにする。
- 4) ヤオトンとは、窑洞と書き、山崖に掘りこまれた洞穴式住居を指す。その多くが山西省や陝西省、甘肅省などの黄土高原地域にみられる。
- 5) 「五福捧寿」というのは、吉祥を示す図絵の名称である。これは、「寿」の字が中央に書かれ、その周りを取り囲むように図案化された5匹のコウモリが描かれたものである。コウモリは漢字で「蝙蝠」と書くが、最後の「蝠」という字が「福」と同じ発音であることに由来する。
- 6) 原文中で、タルチョーは「風馬旗」と記述されている。このタルチョーとは、チベットでみられる青・白・赤・緑・黄の五色旗のことである。

付記：翻訳に関しては、藤川が元訳をし、それに修正、追加などを加え、小熊が監訳をした。したがって、翻訳の責任はすべて小熊にある。



写真1 陕西省韓城市党家村の景観



写真2 大晦日の夜、蒸したばかりの花饅頭と礼饅頭



写真3 農家における神祭り、祖先祭りの供物台



写真4 党家村「民俗館」に陳列された一組の「虎饅頭」



写真5 嫁迎えに来た新郎と「棗蒸」(の容器)をもつ少女



写真6 婚礼における「餛飩饅」(礼饅頭)



写真7 婚礼における新郎が贈る一組の「虎餛飩」



写真8 新婚の部屋における花饅頭



写真9 西庄镇の花饅頭店



写真10 農婦たちが一緒に花饅頭をつくる



写真11 完成した「寿盤」の形



写真12 「寿盤」の花饅頭(生地)



写真13 蒸したばかりの七夕花饅頭：果物饅頭（桃・ぶどう）、硯饅頭、裁縫道具饅頭



写真14 党家村「民俗館」：中秋節の「月餅饅頭」



写真15 花饅頭をつくる道具